チェリー・パーカーの熱い冬

Warbride–A Long Way to Australia

遠藤雅子

his son, Gordon, wife and Jimmy Parker, who is ker with her two are due to ar in a month.

Warm welcome arranged for Japanese wife

By MARY COLES, staff reporter

Mrs. Gordon Parker, who will be the first Japanese wife of an Australian serviceman to arrive in Australia, will step straight from the street into the big garden surrounding the home of her parents-in-law at Ringwood, Victoria. There are no gates for her to push open.

THEY were pulled down 15 years ago because Gordon's parents, Mr. and Mrs. Harry Parker, wanted their children and friends always to regard their rambling two-storied home as an "open house."

In her bedroom Mrs. Parker will find another gesture of welcome—a friendship bouquet of spring daffodils and hyacinths growing in a bowl.

It was sent by an unknown well-wisher when the Federal Government announced last March that Australians married to Japanese girls were to be allowed to bring their wives to Gordon and his brothers and sisters, are waiting for Margaret and Kathleen to play with.

And their eight-year-old uncle, Jimmie Parker, is ready to teach them to ride his pony.

At the Ringwood Church of England the Rev. F. E. Lewin is planning a special welcome for Mrs. Parker the first day she attends a service there.

Mr. Harry Parker is a former Mayor of Ringwood, and managing director of a well-

nier, aged 15, and Jimmie, 8, who are both at school.

Discussing her son's marriage to Cherry, Mrs. Parker said she had always believed that racial prejudices were in direct opposition to Christian teaching.

"I feel that if a man loved a woman deeply enough to marry her, no one has any right to interfere," she added.

"My only concern about such marriages is for the children, who can be hurt by the cruelty of some people.

"We know that Margaret and Kathleen will have problems to face at times, but we will be right behind them in all ways."

The story of Gordon and Cherry is one of devotion and strangle.

Gordon joined the A.I.F. at the age of 18, a few months before the war ended. He remained in the Army to serve with B.C.O.F. in Japan.

Since he had always been keen to be a doctor, never

his son, Gordon, wife and Jimmy Parker, who is ker with her two are due to ar in a month.

チェリー・パーカーの熱い冬

Warbride–A Long Way to Australia

遠藤雅子

新潮社

著者紹介

1937年兵庫県芦屋市生れ。
著書に「シドニーの午後」「謎の異国船」「帆船日本丸」（共著）「生命、ありがとう―劇症肝炎から生還した夫」（新潮社刊）などがある。

チェリー・パーカーの熱い冬

1989年9月5日　印刷

1989年9月10日　発行

著　者　遠藤雅子

発行者　佐藤亮一

発行所　株式会社新潮社

〒162 東京都新宿区矢来町71／振替東京4―808
電話・業務部03(266)5111・編集部03(266)5411

価格はカバーに表示してあります。

印刷所　三晃印刷株式会社

製本所　株式会社大進堂

© Masako Endō 1989, Printed in Japan
乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社通信係宛お送り下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

ISBN4-10-361402-1 C0095

チェリー・パーカーの熱い冬　＊　目次

第一章　敵国の花嫁　7
メルボルン空港／焼け跡の春
第二章　兵士の夢　26
戦争の終結／兵士の夢／壁
第三章　禁じられた愛　50
芽生え／暗雲／パーカー家の血
第四章　愛すればこそ　81
別れ／家族との再会／愛の書簡／長女誕生／呉への道／離港
第五章　再会　126
非情な仕打ち／再会／結婚／二ポンド紙幣

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

第六章　強いられた別離　147
家族の絆／泥棒事件／許可申請却下
第七章　長い道　181
支えられて／国の事情・個人の事情／破られた沈黙
第八章　再び呉へ　218
夫の役目／朗報／船出
エピローグ　234
あとがき　241

装幀＊坂川栄治

チェリー・パーカーの熱い冬

第一章　敵国の花嫁

メルボルン空港

南半球にあるオーストラリアの七月は、真冬である。

南極から冷たい風が吹き込むこの国第二の都市メルボルンは、この時期にはかなり冷え込み、朝晩の気温が摂氏三、四度まで下がる日も珍しくない。京都に似て碁盤の目のように整った通りや、ロンドンを真似た教会や公園の多い街並に、鉛色の雲のたれこめる冬空はよく似合う。同じオーストラリアでも、青空と太陽のイメージの先行するシドニーやブリスベンに較べると、メルボルンはヨーロッパ的な落着きを漂わせている街である。

昭和二十七年の七月八日。メルボルンの街は前年に引続き、気象台始まって以来三度目という積雪を記録、郊外の牧場まで白く薄化粧をしていた。

その積雪から三日後の七月十一日。

メルボルンの空港には緊迫した空気が張り詰めていた。乗客や送迎人でごった返す光景は、い

つもの空港と変わりがない。しかし一つの集団の周りだけが異常な膨らみ方をしていた。カメラやメモを手にした報道陣の他に、明らかに警備のために派遣されたと思われる人間も混じっている。

彼らの待ち受けていたのは、「チェリー」という名の女性であった。オーストラリア人ではない。二十三歳の日本女性である。彼女は広島県の出身で、本名を桜元信子といった。彼女の名前は朝鮮戦争の勃発した昭和二十五年から、サンフランシスコ講和条約の調印された二十六年、さらに翌年にかけ、再三オーストラリアの新聞雑誌に登場、紙面を賑わした。元敵国の日本から、オーストラリアへの入国を求める戦後初めての人間、いわゆる「戦争花嫁」としてであった。

彼女は終戦後の昭和二十一年、占領軍として広島県の呉に進駐してきたオーストラリアの青年兵士と結ばれた「日本人妻」であった。

第二次世界大戦で、日本とオーストラリアは太平洋上の多くの島で激しい戦いを繰り広げた。特に開戦当初の日本軍の進撃は凄まじく、オーストラリアにとり北方の関門であったシンガポール、マニラが陥落、続いて彼らの戦略的要地であったラバウル、カビエンも失い、次にジャワ、ビルマも制圧された。そして日本の勢いはオーストラリアの頭上に当たるニューギニアにまで伸びてきていた。そればかりではない。開戦から僅か三か月の間に、オーストラリア軍は二万人を越す兵士を捕虜に取られた。彼らの衝撃は大きく、日本軍の猛攻にオーストラリアの国民は顔色を失し、パニック状態に陥る者もいた。

しかしその一方で、建国以来初めて遭遇する自国の深刻な事態に奮起したオーストラリア軍の反撃は熾烈を極め、不幸にも両軍は多数の犠牲を出す結果となった。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

今大戦でオーストラリアが日本軍との戦いで失った兵士は二万人に上った。これとは別に、日本軍に捕えられた捕虜の内の三分の一、約八千人が帰らぬ人となっている。同じ大戦でも、ヨーロッパ、アフリカ、中東地域に派兵され、捕虜となったオーストラリアの兵士八千名の内、死亡した兵士は、病死を含め二百六十五人に止まっている。両者に見られるこの差こそ、日本がオーストラリアの反感を買う原因になった。

映画「戦場にかける橋」（ピエール・ブール原作）で知られる泰緬（タイ・ビルマ）鉄道（四一五キロメートル）は、物資や人馬の供給上、日本軍が是が非でも確保したかったルートである。日本軍は昭和十七年六月に、この鉄道の建設命令を出し、翌年の十月には鉄道を完成させるべく突貫工事を命じた。このためこの労働には、オーストラリア兵士を初め連合軍の捕虜が約六万人、さらに二十五万から三十万人にものぼる東南アジアの労働者が駆り出されたといわれている。ジャングルを切り開き、急な流れの河川に橋を架ける作業は困難を極めた。この折り日本側が彼らに対して行った非人道的な扱いや、過酷な労働条件で犠牲になった人は十万人にも上ると言われている。この鉄道には「死の鉄路」という別名が付けられているが、これはこの鉄道が「枕木一本に一人の犠牲者」を出すほど残酷な状況下で建設されたことからの呼び名であるという。

戦争に勝利を収めながら、かつて泰緬鉄道の工事に駆り出された捕虜達の脳裏から、その時受けた仕打ち、体に残された傷、目にした衝撃的な情景は消えることはなかった。戦場から戻った兵士の、日本人に対する憎悪や不信感は、我々の想像以上に凄まじかった。終戦直後のオーストラリアの対日感情が冷え切っていたのは、こうした理由からであった。

このため終戦直後、日本に進駐していた連合軍の中で、最も厳しい反宥和政策を打ち出したの

もオーストラリアである。彼らは兵士に対し、日本人との結婚はもとより、交際も固く禁じていた。進駐軍の一兵士だったゴードン・パーカーは軍籍を離れ、日本女性と結婚。さらに政府に向かって、正面から日本人妻の入国を申請した。

しかし、オーストラリアは一九〇一年、連邦政府を樹立して以来、この国を白人のユートピアにすることを理想に掲げ、有色人種の入国を厳しく制限してきた国でもあった。彼は二重の壁に挑んだ勇気のある若者であった。

一人の無名の兵士の起こした、軍や国に方針の改善を迫る「日本人妻」の入国運動は、その後四年に及ぶ歳月を要した後、遂に実を結ぶ日を迎える。しかも彼の起こした運動は、法律や世論に止まらず、結果として日豪交流の歴史をも動かすことになる。すなわち、彼女への許可が下りると、それまで密かに入籍を済ませ、入国を待ち望んでいた六百人近い日本女性が次々に申請を出し始め、彼女たちにも渡航の許可が下され、半世紀に及んだオーストラリアの白豪主義の砦を崩すきっかけともなった。

パーカーという兵士にとっては、たまたま彼が愛した相手が日本人であり、あくまでも自分の愛した女性をオーストラリアに迎え、共に暮らすことを願ったに過ぎない。彼は素朴で、しかも切実な願いを叶えたいため、行動を起こしたのであり、決して法律の改正などという大それた事に挑戦するつもりはなかった。

メルボルンのエッセンドン空港の上空から午後の日差しが洩れ始めた。遮るもののない大地が広々と続いている。白い雲の間から、彼女を乗せた飛行機が姿を現した。人々が一斉に上空を見上げた。

何か不穏な動きが水面下で始まってはいないだろうか。軍や政府の関係者の心配している反日派が、行動を起こしてはいないだろうか。

表面的には、一人の日本女性が入国して来るだけであった。けれど、この数年彼女の入国問題の是非を巡り、政府から世論までが激しい論争を繰り返していた。その直後であるだけに、関係者は神経を尖らせた。オーストラリアの政府が彼女の入国ヴィザに、なおも五年の制限を付けた辺りにも、彼らの気を配った跡が窺える。

別離を強いられながら、この日を信じ、ひたすら待ち続けた兵士の日本人妻は、すでに空港に到着していた。間もなくタラップに姿を現すはずである。彼女の入国に反対する意見が、まだ国民の一部に根強く残っている事を承知の上で、一兵士の情熱に押し切られるように許可を下ろした政府、ものものしい警戒態勢は、彼らの不安な気持をそのまま表しているようであった。

辺りが鎮まり、待ち受ける人々の集団の輪が大きく揺れた。桜元信子が姿を現した。信子のことを、名字の桜元から桜を取り出し、それを英語に訳し、チェリーと呼び始めたのは、夫のゴードン・パーカーであった。チェリーは小柄で細身の女性である。子供が二人もいるとは信じられない。地味なグレーのスーツにオーバーを羽織り、黒い革の手袋と同色のハンドバッグで上手にアクセントを付けている。長い黒髪を三編みにし、渦巻のように纏めて束ねている。洋服もハンドバッグも若い夫のゴードンがメルボルンで買い揃え、日本に送った品物である。緊張しているらしい。信子の表情は硬い。カメラのフラッシュにおびえながらも、懸命に彼らの要望に応え、笑顔を作っている。傍らのゴードンにぴったりと寄り添っている。大きな瞳が瞬きを忘れているようだ。長女マーガレットの手をしっかりと握っている。日本生まれの長女は三歳になろうとしていた。次女のキャシーは一歳半、夫のゴードンに抱かれていた。

出迎え人の輪から一人の女性が飛び出した。ゴードンの母親であった。彼女はチェリーを胸に抱き寄せ、

「ウエルカム、待っていたのよ」

を繰り返していた。彼女の胸はマシュマロのように柔らかく、バターのような匂いがしていた。少し間を置き父親のハリー・パーカーも前に進み出た。彼の手には月桂樹が握られていた。その月桂樹をチェリーのコートの胸元に飾り、パーカー氏は静かにチェリーの額に唇を当て、

「よく来たね、待っていたよ」

と語りかけてくれた。カメラマンの要請があり、一家は幾度もポーズを求められ、その都度あちこちでフラッシュが焚かれた。ふくよかな体格のパーカー夫人は、孫のキャシーを両腕で抱き上げ、

「可愛い」

を連発している。長身のゴードンが微笑みながらチェリーを見下ろしている。ゴードンの六人の弟妹たち、ジューンやロビンが次々とチェリーの頬にキスを浴びせている。チェリーの目から大粒の涙が溢れていた。

空港では政府や軍の心配した事態は何一つ起きなかった。むしろ周囲の人々は、戦争という不幸な出来事を乗り越え、国境を越えてまで愛を貫き通した若者に暖かな眼差しを注いでいた。少なくともこの日メルボルンの空港では、彼女の入国を妨害する動きはなかった。それでも関係者は、万一に備え、一家を彼らの家に送り届けるまでは警戒を緩めず、メルボルンから東へ三十キロ、ダンデノン山麓に広がる緑豊かな郊外、リングウッドに向かう彼らの車には、パトカーが先

導した。

翌日のメルボルンの新聞は、いずれも日本人戦争花嫁第一号、桜元信子こと、チェリー・パーカーの入国のニュースを大きな扱いで載せた。いずれも、チェリーと二人の幼児が、夫ゴードンの両親や兄弟たちに迎えられ、抱擁を交わしている心温かな写真を添えている。特に彼らの立場に同情、彼らを激励し、好意的な記事を書き続けてくれていたメルボルンのアーガス紙など、一面のトップに三枚の写真を飾り、

「〝メルボルンこそ私の安住の地です〟チェリーは語る！」

という見出しを掲げ、彼らが入国の日を迎えるまでの経緯を大々的に紹介した。

オーストラリアの兵士が、日本人妻を入国させることを禁止した厳しい規則は、パーカー夫妻に許可が下りた事を境に緩和され、彼らの切り開いた道に、この後約六百人の日本女性が続く。一人の兵士の起こした「人間愛」に根ざした勇気と忍耐の行動は、結局一国の法律を動かしたばかりか、戦争後、冷えきっていた日豪関係を好転させる貴重な節目の役割まで果した。だが、なぜか日本人が、この経緯を詳しく知る機会はこれまでなかった。

長かった「戦い」の日々の苦労についてコメントを求められたゴードン・パーカーは、暫く間を置いた後、

「政府に感謝しています。なぜなら政府は、わたしの申請を再度却下することも可能であったからです」

と、政府に謝意を表した。二十四歳の若者とは思えない抑えた言葉を彼は選んだ。けれどこの言葉は、彼の正直な気持を表してはいない。本当の彼には話したいことは山ほどあった。この日

を迎えるために待たされ続けた時間。その間に支払った経済的負担、精神的苦痛。不平や不満や抗議、諸々の思いが喉元まで出ていた。けれど、彼は気持を抑えた。それは彼のケースの顚末を固唾を呑んで見守っている兵士が、日本の呉に沢山いたからである。彼らのためには、まだ事を穏便に済ませておく必要があった。ゴードンがこみ上げてくる気持を抑えたのは、そのためである。そしてこの後、呉の兵士が提出する日本人妻の入国申請は、書類さえ整っていれば、半ば自動的に認可され出した。その上、彼女たちがオーストラリアに渡る旅費は、オーストラリア側が負担することになった。ゴードンは苦笑した。彼が四年もかけた時間や、二度にわたり、自費で日豪間を往復した負担とは一体何であったのだろう。ゴードンは恵まれた条件で、配偶者を呼び寄せることが可能になった仲間に、複雑な思いを抱いた。

リングウッドにあるパーカー家にも大勢の人が詰めかけ、この家の長男が日本から連れて来る花嫁と二人の娘の到着を待ちかねていた。親類や友人を初め隣人たち、ゴードンの起こした運動を、陰になり日向になり支えてくれた人も混じっていた。ゴードンの幸運は、途中から両親を初め姉弟や、家族の知合いまでが味方になり、協力してくれたことである。教会の関係者や政治家に動いて貰えたことも幸いした。

いつの間にか家に入りきれない客が外に溢れていた。新聞社やラジオ局はなおも執拗に追いかけてきていた。居間のテーブルにも、食堂のテーブルにも、花束や贈物が積み上げられていた。電話のベルは途切れることがなかった。見も知らぬ人から電報が続々と届けられていた。個人ばかりではなく、企業からも子供服や旅行への招待などが届いていた。誰が作ってくれたのか、二人の歓迎の言葉をあしらった大きなケーキが運ばれてきた。周囲の人に促され、ゴードンとチェ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com